

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18560623

研究課題名（和文） 堀口捨己資料（自邸所蔵分）に関する研究

研究課題名（英文） Research on the Materials of the Architect Sutemi Horiguchi.

研究代表者

藤岡 洋保 (FUJIOKA HIROYASU)

東京工業大学・大学院理工学研究科・教授

研究者番号：40100987

研究成果の概要：

本研究は、建築家・堀口捨己（1895～1984）が自邸に遺した膨大な資料（図面・写真・蒐集書籍等）を整理しつつ、そこに窺える堀口の建築観や研究の背景について分析したものである。

資料の総点数は4429点で、内訳は、図面（設計図）712点、1923年の外遊時に集めたものを中心とする洋書96点、写真2,199点、書翰717点、茶道関係資料705点であった。図面には、紫烟荘や双鐘居の設計図など貴重な原図が含まれ、洋書や写真からは、堀口が近代美術工芸やドイツ表現派・アムステルダム派などの新建築に強い関心を示していたことがわかる。書翰からは、戦前の堀口の多彩な芸術活動を支えた人脈を知ることができる。茶道関係資料は茶書と起こし絵図からなり、戦前の堀口の茶室研究・利休研究で使用された基礎資料が数多く含まれていることが確認できた。

以上から、堀口自邸資料は数多くの新知見を与えてくれる貴重な資料であり、明治大学所蔵資料とあわせることで、かつて明治大学聖橋校舎にあった堀口捨己の資料の全体像を復元できるものといえ、今後の堀口捨己研究に大きく寄与するものとして、極めて貴重な資料と考えられる。

交付額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2006年度 | 1,700,000 | 0 | 1,700,000 |
| 2007年度 | 400,000 | 120,000 | 520,000 |
| 2008年度 | 400,000 | 120,000 | 520,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,500,000 | 240,000 | 1,040,000 |

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学、建築史・意匠

キーワード：堀口捨己、アーカイブズ、図面資料、写真資料、茶道

1. 研究開始当初の背景

堀口捨己（1895-1984）は、日本近代を代表する建築家だただけではなく、日本建築史、庭園史、茶道史に関してもきわめて造詣が深かった。彼の資料はそれを反映して多岐にわたる。その資料は、かつて明治

大学聖橋校舎の堀口研究室にあったといわれるもので、彼が定年で明治大学を去るときに、彼の指示で、当時新設されたばかりの生田校舎（工学部、現理工学部）と大森の自邸に分けて運ばれたという。

このうち、生田校舎に残されているもの

については、筆者らが平成 9 年度から 11 年度の科学研究費補助金(基盤研究(C)(1))を得てすべて整理し、データベースの作成を行うとともに、その資料の価値を評価した。その成果は、『堀口捨己図面史料に関する基礎的研究』(課題番号 09650704)にまとめられている。そこでは、明治大学所蔵の図面史料は 5,624 点で、彼の学生時代から 1965 年までを網羅し、岡田邸(1933)や若狭邸(1939)などの著名な建物の設計図をはじめ、大徳寺孤蓬庵山雲床の実測図など貴重なものが数多く含まれるものだったことを明らかにした。

しかし、大森の自邸に行ったものの内容は、当時まったく知られないままだった。それが、同邸が解体されることになった平成 17 年秋に堀口家から藤岡に連絡があり、そのご依頼を受けて自邸に残されていた資料を引き取り、調査する機会が得られたのである。この 2 つの情報が揃うことによって、堀口資料といわれるものの全貌がはじめて明らかになる。そして、それは後述のように、彼の生涯をほぼ網羅するもので、設計図から写真、蔵書、書簡、茶道関係資料など、多岐にわたるものであることがわかったのである。これまでの堀口研究は、彼が書籍のかたちで、また雑誌に発表した情報をもとに行われてきた。つまり、堀口が設定した枠内で行われてきたといっても過言ではない。しかし明治大学所蔵分、そして今回の調査でその全貌を確認できた資料は、従来その存在をまったく知られていなかったものなので(そしておそらく堀口自身もそれが公になることを想定していなかったものなので)、その学術的価値はきわめて高い。それをもとに、堀口に関する研究にまったく新しい可能性が開けたのである。

2. 研究の目的

自邸所蔵分の資料を整理・分析し、明治大学所蔵資料と合わせて堀口資料の全体を明らかにすることが研究の目的である。これら貴重な資料を後世によりよい形で伝えていくため、資料のデータベース化を行ってリストの作成を行う。一部の貴重な資料については補修を行うとともに、有効活用するためにデジタル化を行うこととする。

3. 研究の方法

大森の堀口の自邸に残されていた彼の資料は、事前に整理された状態になっていたわけではない。実態は、残されていたというよりも、彼が病床に伏せったときの状態のまま、手つかずになっていたということだった。したがって、建築関係資料だけではなく私的なものも混在していたが、当時それをその場で

仕分けするのが困難だったため、とりあえず筆者の研究室に引き取ったあとで、1 点ずつ確認・整理・分類することから作業をはじめることになった。現実にはその区分けをしがたいものが少なからず残ったが、残されていたもののうち、建築関係資料として意味があると見なされるものを以下のカテゴリーにわけることができ、ここではそれを「堀口自邸資料」と呼ぶことにする。

その資料は、1) 図面史料、2) 蔵書(特に 1923 年の外遊時に購入したもの)、3) 写真(1923 年の外遊時に彼が撮影したものから、本人・家族のアルバムまで)、4) 書簡(著名人からのものが多数含まれる)、5) 茶道関係史料(主に茶書と起こし絵図)、に大別できる。

以上の図面、蔵書、写真、初刊、茶道関係資料それぞれについて、1 点ずつ整理番号を付し、データベースを作成する。データベースのフォーマットは、既に整理済みの明治大学所蔵資料で使用したものに倣う。図面資料は破損が見られることから補修した上でデジタル化を行う。写真、書翰などはスキャナーまたはデジタルカメラでデジタル化する。

4. 研究成果

本研究では、文部科学省科学研究費基礎研究(C)を得て、平成 18 年度から 20 年度にかけて「堀口自邸資料」の内容を明らかにした。以下にその結果をまとめる。

(1) 図面史料

総数は 712 点で、主に堀口が設計した建物に関するものである。つまり、設計図が中心ということである。特に注目されるのは、紫烟荘(1926)や双鐘居(1927)、聴禽寮(1937)などの、初期の代表作のオリジナルの設計図が含まれることである。このうち前 2 者は、初期のパトロンの一人だった牧田清之助(1887-1947)関係で、『紫烟荘図集』(洪洋社、1927)や『住宅双鐘居』(洪洋社、1928)で知られるものの、明治大学堀口資料にもほとんど設計関係資料が残っていないものだった。また、聴禽寮は、やはり彼のパトロンの一人である吉川元光(1894-1953)の山中湖畔の別荘で、明治大学堀口資料に 78 点の設計図があるが、自邸資料の 30 点の図面を加えることによって、その設計の際に作成された図面がかなり揃ったといえる。両方をあわせることによって、基本図から詳細図まで、工事に必要な設計図書がひとつとおり揃うことになるからである。

紫烟荘に関しては、この資料から建設場所を特定できることになった。仕様書に「埼玉県北足立郡芝村字宮根五千参百四拾七」とあり、それをもとに、現在の川口市大字芝 5,347 番地であることがわかる。法務局出張所でこの土地の登記簿を調べると牧田の名は登場

しないので、借地だったこともわかる。

双鐘居に関しては、『住宅双鐘居』には平面図をはじめ、この建物の敷地や建物の全容をうかがわせる情報がなく、室内など、細部の写真が掲載されているだけだったため、その詳細についてはこれまでわからないままだった。しかし、堀口自邸資料にはこの建物に関する 36 枚の設計図があり、そこに平面図や立面図が含まれることから、敷地面積 889.31 坪、延床面積 153.3 坪の、木造 2 階建ての大邸宅であることがわかり、さらに残されている図面がおもに家具の設計図で、それも『住宅双鐘居』に紹介されたものと対応することから、新築ではなく、おそらく改築だったこともうかがえる。ちなみに、立面図には屋根勾配を緩やかに変更した跡が見られ、当時堀口が好んでいた急勾配の屋根をここでも採用しようとしていたらしいことがわかる。さらには、その「客間」の障子張りに関して、「本太鼓張り」や「以下内側ニ張ルコト」（西側では下から 5 段目まで、東側では下 2 段だけ、障子紙を室内側に、その上は室外側に張るよう指示）していることもわかり、堀口が、障子を伝統的な要素としてではなく、線と面の抽象的な「構成」の要素として扱っていることがうかがえる。

このように、堀口自邸資料の設計図から、堀口の設計のやり方についての新知見を得ることができるのである。(以上、藤岡洋保、山崎鯛介「紫烟荘と双鐘居の設計図」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)』2005 年 9 月、pp.215-216 参照)

(2) 蔵書

蔵書は膨大な量があったが、今回の「堀口自邸資料」に含めたのは洋書である。それ以外の建築関係図書は、明治大学生田校舎に移送、保管されている。その点数は 96 点で、大半は堀口が 1923 年に洋行した際に現地で購入したものである。それは、その多くの本の見返しに「ホリクチステミ」の印影があり、そこに自筆のインクで「1923, Berlin」のようなメモがあることから確かめられる。そこに見られる特徴は、建築よりもむしろ美術、それも現代美術工芸に関するものや、アフリカを中心とする原始美術に関するものが多いことである。これは当時の彼の関心のありかを示すものとして注目される。つまり、現代美術全般に関心があり、建築もその一環としてとらえていたということがうかがえるのである。

ちなみに、ル・コルビュジェの有名な“*Vers une architecture*” (建築へ) もパリで購入しており(「ホリクチステミ」の印影に「1924 Paris」のサインがある)、当時の最新傾向にも配慮していたこともわかる。なお、彼が帰国後の 1926 年にそのドイツ語版“*KOMMENDE*

BAUKUNST” (1926 年版) を購入したこともわかる(その見返しに鉛筆で「Stemi Horikuti」の自筆のサインがある)。

(3) 写真

写真はアルバムに貼ったかたちで残されていた。そこでは 1 冊のアルバムに建築写真と人物写真が混在している例が見られ、建築写真だけを峻別するのは困難だった。そこで、アルバムごとにデータベースを作成することとした。その結果、アルバム数は 22、写真総点数は 2,199 になった。その撮影年代は必ずしも明らかにできないが、1923 年の外遊時から最晩年までにわたることはまちがいない。

このうち、特に注目されるのが外遊時に本人がとったと思われる写真で、これにより彼がオランダ、ドイツ、オーストリア、チェコを回ったことが確認できるだけでなく、もっぱら新建築に興味を寄せていたらしいこと、そしてその装飾、それも抽象的な構成をテーマにしたものに関心を持っていたことがうかがえる。また、アムステルダム派の作品が数多く含まれるだけでなく、ドイツの表現主義(アインシュタイン塔など)の作品、チェコ・キュービズムのものも見て回っており、この頃の堀口の関心のありかに対応している。ちなみに、マグデブルグのタウトの建物の写真が複数あることから、この当時はタウトにかなり関心を持っていたらしいこともうかがえる。

また、この写真資料には、堀口自身の写真が数多く残されており、建築家としての彼の経歴の全般にわたって彼の姿を追うことができるし、ほかでは見つからない、彼の両親や兄の堀口由己の写真があることもこの資料の価値を高めている。

(4) 書簡

書簡は、717 点ある。消印からわかるこれらの時期は、六高在学中の頃から晩年までと幅広いが、戦前のものが全体の半数以上を占めている点が注目される。この中には、分離派建築会同人の石本喜久治・滝澤真弓らからのものや、藤井厚二、坂倉準三など有名建築家からのものがあり、日本の近代建築運動の初期における建築家同士の交流の様子を知ることができる。特に藤井厚二は、堀口にとっては第六高等学校と東京帝国大学建築学科の先輩ということもあったためか著書のやりとりをしていたようで、たとえば堀口からの献本(『紫烟荘図集』)への礼状の中で、「従来の和風建築の研究が必要ではないかと思えます」などと、藤井が後輩の堀口に対して先輩建築家としてアドバイスをしている書翰が複数残されている。また、松永安左エ門(耳庵)を筆頭に、西川一草亭や松山米

太郎（吟松庵）、小林一三（逸翁）など著名な茶人からの書簡も数多く残されており、堀口が戦前に開始した茶室研究がどのような人的交流の中で進められていったかを知ることができる。

以上のことから、これら書簡は、堀口の多彩な芸術活動を支えた彼の人間関係について知ることのできる、貴重な資料といえる。

(5) 茶道関係史料

茶道関係資料は、茶書が296点、起こし絵図が409点ある。一部に古書店の帯が挟まったままのものがあることから、これら茶道関係史料の多くは堀口が古書店を通じて購入したものとみられる。この中には堀口の茶室研究、すなわち戦前においては『瓶史』や『茶道全集』（創元社）への参加と『利休の茶室』（岩波書店）に代表される堀口の千利休研究、また戦後においては『茶室おこし絵図集』の編集で使用された資料が多く含まれていると見られる。堀口がこれら論文の中で「家蔵」と記している茶書や起こし絵図がこの中に含まれていることも確認できた。特に「荒木撰津守宛伝書」や「覃斎起こし絵図」など、その多くは現在でも茶室研究の基礎資料と位置づけられているものであり、極めて資料的価値の高いものといえる。

以上に記したように、「堀口自邸資料」の内容を明らかにした。それをまとめると以下のようなになる。

資料総点数は4429点で、図面（設計図）712点、1923年の外遊時に集めたものを中心とする洋書96点、写真2,199点、書簡717点、茶道関係資料705点に大別できる。

図面には、紫烟荘や双鐘居の設計図など、これまで知られていなかったものが含まれ、堀口捨己研究に資する貴重な資料といえる。

洋書は、彼が1923年に渡欧したときに購入したものが中心で、そこから当時の彼の関心のありか、より具体的には、近代美術工芸に関心を寄せていたことがうかがえる。

写真資料にもこの外遊時のものが含まれ、彼が当時の新建築、それもアムステルダム派やドイツ表現主義に強い関心を持っていたことがうかがえる。そのほかに彼の姿を伝える写真も多く、この写真資料の学術的価値が高いことが認められる。

書翰は、戦前のものが半数以上あり、内容も分離派建築会同人や著名な建築家からのもの、松永耳庵をはじめとする著名な茶人からのものが含まれているなど、堀口の多彩な芸術活動を支えた人脈を知ることのできる貴重な資料といえる。

茶道関係資料は、茶書と起こし絵図からなり、戦前からの堀口の茶室研究・利休研究で使用された基礎資料が数多く含まれて

いる。中には、堀口が論文の中で「家蔵」と記した資料も含まれており、茶道研究にとって極めて価値の高い一級資料といえる。

以上から、「堀口自邸資料」は、数多くの新知見を与えてくれるもので、明治大学堀口資料とあわせることによって、かつて明治大学聖橋校舎にあった堀口捨己の資料の全体像を復元できるものといえ、今後の堀口捨己研究に大きく寄与するものとして、きわめて貴重なものと考えられる。

筆者らは、これらの新資料をもとにすでにいくつかの新知見を発表してきた。ここでは建築家としての堀口捨己にだけではなく、また建築史研究者、庭園史研究者、茶室・茶道の権威という個別の側面を見るのではなく、それらをトータルにとらえる視点を採用し、「総合芸術家」として見るという、新しい堀口像を提示している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 藤岡洋保、山崎鯛介、「市街地の一住宅」の設計経緯と発表の趣旨、日本建築学会大会学術講演梗概集（中国）、F-2、pp.295-296、2008年、査読無）

〔学会発表〕（計 1 件）

① 藤岡洋保、山崎鯛介「市街地の一住宅」の設計経緯と発表の趣旨、日本建築学会大会、2008年9月19日、広島大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤岡 洋保 (FUJIOKA HIROYASU)
東京工業大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号：40100987

(2) 研究分担者

山崎 鯛介 (YAMAZAKI TAISUKE)
千葉工業大学・工学部・准教授
研究者番号：10313339

(3) 連携研究者

なし